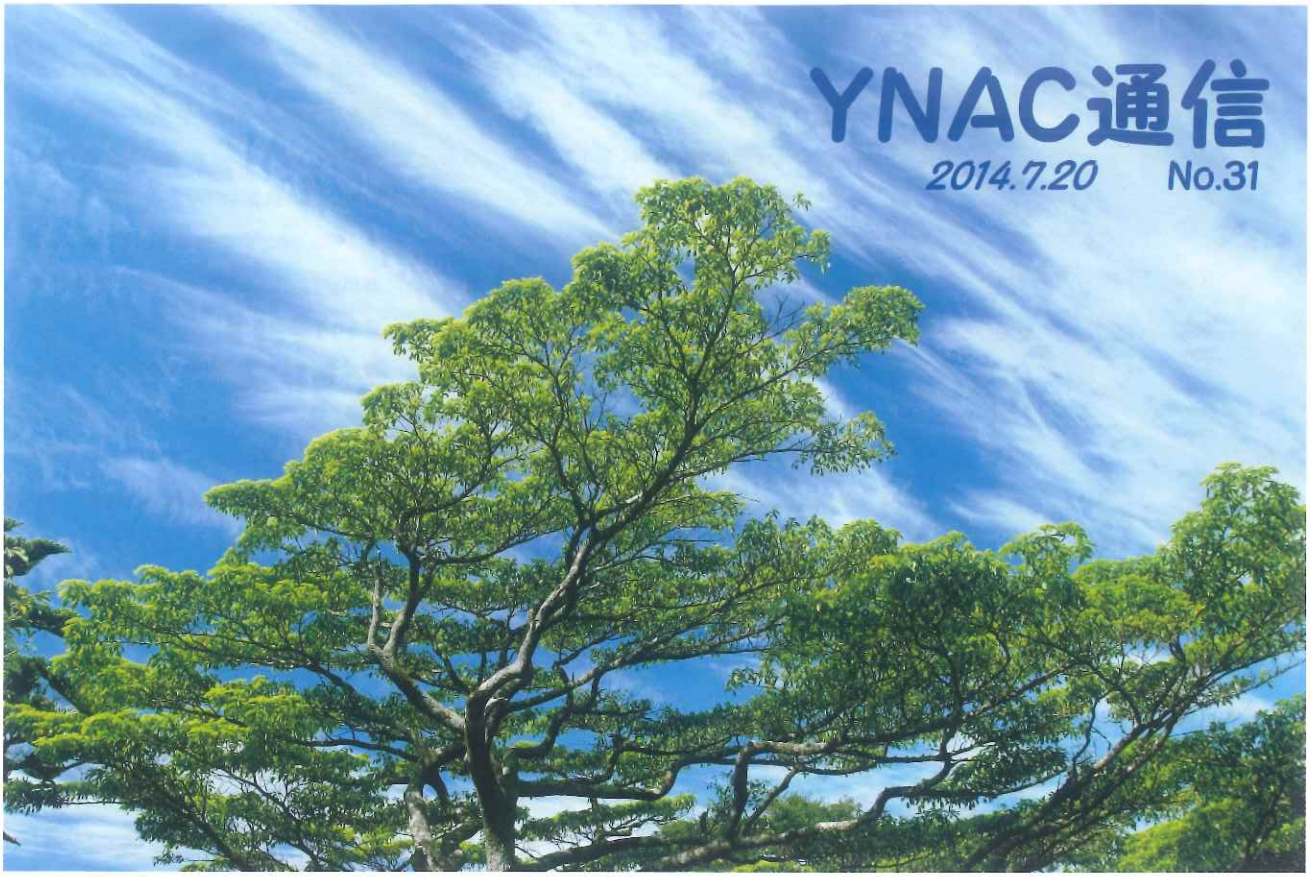


地域の民俗文化の再興とエコツーリズム

小原　比呂志

この 500 年間、屋久島の歴史の重要な部分をになってきたのは、実は日蓮宗（法華宗）だった。

延喜式以来、式内社として 1300 年の歴史を誇る益救神社だが、500 年前の日蓮宗の布教後いつのまにか消滅し、江戸時代になってやっと復興されたという。それも日蓮宗の管理のもとで。

1488 年、種子島氏の肝いりで本能寺の日増上人が山神を制圧する儀式が行われた。これが奥岳開発のたてまえを全島に示す重要な機会になったらしい。

歴史上、屋久島がその姿を現わすのは、戦国後期から江戸初期にかけて安房出身の朱子学者、泊如竹が活躍して以降のことだ。如竹は当時全村日蓮宗である安房の出身で、国内各地への出張が一段落するたびに、必ず安房本仏寺の住職に復帰している。如竹は朱子学者としてのステータスと、日蓮宗法華僧としての身分を使い分けて仕事をしていたらしい。

屋久島の岳詣りは「むかし」から山の神を恐れ敬って、続けられていた、と信じられているが、少なくとも江戸時代以降は、山の神の祟りを和らげるセレモニーとして発展しているようで、主に屋久杉伐採という経済活動のための宗教的安全保障だったと考えられる。

寺は村々の要の地に位置して、民政や教育を指導し、「宗教的安全保障」を管轄した。神社や岳詣りなどの山岳信仰も、日蓮宗が担当したらしい。屋久杉の出荷によって経済的に活性化した屋久島では、日ごろ事あるごとに「南無妙法蓮華経」のお題目が唱えられていたと江戸末期に編纂された『三国名勝図絵』に記されている。

この日蓮宗にリードされた時代を終わらせたのが、廃仏毀釈だった。屋久島のほぼ全集落にあった日蓮宗寺院がすべて破壊され、仁王像は打ち倒され、墓石の仏字は掻き消された。寺に保管されていた村々の民生の記録はすべて燃やされたらしい。日蓮宗の歴史的な実績は消滅してしまった。

わずかに楠川区で保管されていた「楠川文書」だけが、屋久島の直接証拠として残されている。それ以外には薩摩藩関連と、日蓮宗寺院の本山であった京都本能寺関連の資料がわずかにあるだけだ。

現在屋久島ではエコツーリズムの興隆とともに民俗文化の復活を志向する人が増えてきた。たとえば集落ごとの岳詣りの再興がそうだ

エコツーリズムのおかげで、などというと反発を感じるむきもあると思うが、世界遺産以来の島外からのまなざしが、運動の機運になったことは間違いない。そういう意味ではエコツーリズムは、成功・失敗にかかわらず、地域を改めて見直そうと促すきっかけになる。

そうすると歴史の掘り起こしが不可欠になるのだが、なにしろ薩摩に古文書なし、と言われる土地柄だ。廃仏毀釈と、おそらく密貿易など藩のグレイゾーンの広さのせいだろう。廃仏毀釈さえなければ…しかしいずれの時代も変革のたびに焚書坑儒だ。情報は遮断され、人は消される。

現代はまさにそんな時代になりつつあるようだが、せめて地域のことくらいは　エコツーリズムの旗のもと、納得のゆくまで掘り下げてみたいものだ。

三穂野杉

YNAC 通信31号のスペシャル企画ということで、YNAC スタッフが市川家に集い、魅力的な木の話を熱く語り合いました。口火を切ったのは…渡部さん。

まずは屋久杉

渡部：私のお気にいりは「ミホノ杉」です。何だろう？期待していなかった分・・・

樫村：期待してなかった(笑)

渡部：大和杉を見に行く途中で、すれ違った方に「ミホノ杉は見たほうがいい」と言われ、場所を教えてもらい見に行ったので・・インパクトがもすごかったけど、知らなかった分、感動が大きかった。

市川：俺もこないだ大和杉に20年ぶりくらいに行ったんだけど、途中の三穂野杉のほうが見栄えがしたね。大和杉は、手前の木が倒れたかなんかで荒れた感じだった。三穂野杉はすごい苔むしててそれらしいというか。

樫村：三穂野さんっていうのは人の名前。なんか昔の話を読んでると、三穂野さんが屋久島のどこそこに登ってどうとかっていう・・・山岳会の人とかじゃないですかね。

市川：じゃあ、樫村ちなみに小田杉は何で小田杉になったか知ってる？

樫村：営林署のおじさんの名前じゃないですか？

市川：営林署のおじさんの名前ってとこまではみんな知ってるんだけど、じゃあなんでそのおじさんの名前がついたかってことは誰も知らないんだよ。

渡部：どれが小田杉かってはっきりしないって言う話を誰かに聞いたことある気がするんですけど。

市川：昔は、小田杉だって釈迦杉だって名前を書いたプレートが貼ってあったんだ。いつの間にかなくなって、そういう意味では名前ってどんどん消えていくんだよね。ほっとくと。それこそ白谷の奉行見晴らし台とかシャラの展望台とか。

松本：世界一笹川杉とかね。

渡部・佐野：なんですか？それ？

池田：淀川登山口に近い場所にある杉。

松本：笹川良一って知ってる？日本船舶振興会の会長さんだったの。競艇で儲かった金でB＆G財団を作って、各地にプールやら体育館やらを寄付してたのね。で、屋久島でも寄付してもらおうと笹川良一を接待したの。もうその頃は歩くのもやっとというくらいだったけど、屋久杉に名前をつけたいというので、車からすぐに行くことができる杉に連れて行って、じゃ、先生この杉に名前つけてくださいって話になって。それで「うーん。世界一笹川杉！」って、しょうがなしに世界一笹川杉って看板を立てたんだけど。

市川：すぐその年の台風でぶっ飛んだんだよ。でも幸いなことに誰も立て直さなかったので、名前も消えていった。じゃぁ他に好きな屋久杉ってありますか？

池田：今日も白谷雲水峡でお客さんに言われたんですけど、びびんこ杉のすぐ下に斜めに生えている杉、「あれ、なんて杉ですか？」ってよく聞かれるんです。名前は無いから、「これ名前ついてないんですよね」って言うんですけど、僕は実はひっそりと「ラオウ杉」と名前をつけているんですよ。北斗の拳のラオウですね、死ぬときに右手を挙げて「わが生涯に一片の悔いなし」って死ぬんですよ。それに似ているから。

樫村：大爆笑

松本：俺はいつもあそこでさぁ。びびんこ杉は一般公募でつけられた。で、こうやって一般公募で当選すると、この杉は何百年も生きるんだからこれから何十数年も語り継がれていく、もし、今度一般公募の機会があったらぜひとも応募して、後世に名を残してください。じゃ、手始めにこの杉なんてつけます？って問いかけるんだけど、あんまり具体的な名前が出てこないんだよね。

市川：いい名前って難しいね。

松本：俺は頑張り杉ってつけてるんだけどね。

佐野：あー。がんばりすぎ！あっはっはっは。

市川：佐野君はどうなの？

佐野：自分は花山広場の杉がすごい好きです。あの、全体の風景も好きですけど。

市川：花山の大杉。あれはなかなか立派なやだな。

耐えて頑張る木

松本：あ。つい最近気になった木があるんだけど。これはおおっ！って思ったの。ちゃんと写真撮ってきたよ。この木。

一同：感嘆！！

松本：季節風が吹くんで岩の陰に風を避けたケタンキ（ハマヒサカキ）。これすごいでしょ！

市川：マニアックだなー。

松本：小瀬田の港。

市川：あそこは風強いよなー。

松本：ついこないだ浜清掃行ってて、ふっと見たら、おおっと思ったんだよ。なんじゃこれっていう・・・。ほんとにこれ痛めつけられた中で生き残っているっていう。

市川：ケタンキがここまでやられたら、他の木は育たないよね。

樫村：黒味のてっぺん手前ぎりぎりの杉も過酷ですよね。

池田：そうですね。カッコいいですよね。盆栽みたいに幹も白くなって。

松本：あの辺の杉って何歳くらいだろうね。

樫村：。高さ3mくらいですけど500歳は超えているような…。

佐野：自分はいじめられている系列でいうと「サツキ」が好きですね。白谷雲水峡の飛流おとしやら、さつき吊り橋の下にある。増水したらが一って流されてて、が一って耐えてて、でも6月とか7月になるとやっぱり真っ赤なきれいな花を咲かすっていう。大好きですね。

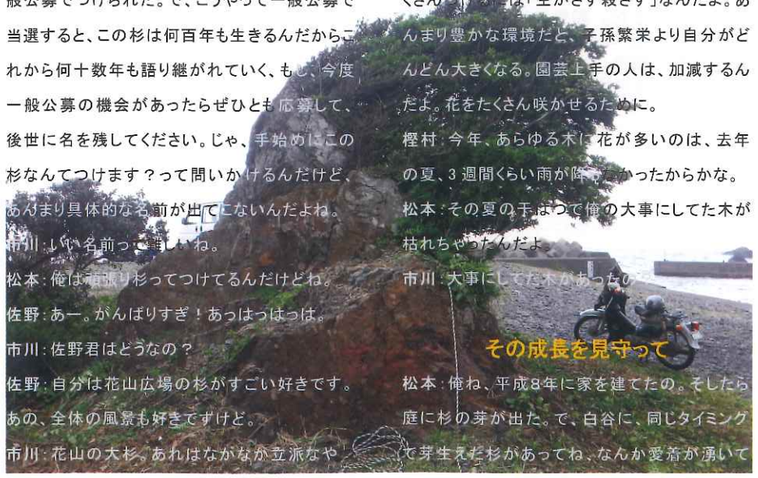
松本：危機感があると、却（かえ）って咲くんじゃない？「ここはだめだ、もっと安定した土地を求めて、種を飛ばそう」って。そんなことはない？

市川：やっぱり園芸の基本で、果実やら花やらたくさんつけるには「生かさず殺さず」なんだよ。あんまり豊かな環境だと、子孫繁栄より自分がどんどん大きくなる。園芸上手の人は、加減するんだよ。花をたくさん咲かせるために。

樫村：今年、あらゆる木に花が多いのは、去年の夏、3週間くらい雨が降らなかったからかな。

松本：その夏の干ばつで俺の大事にしてた木が枯れちゃったんだよ

市川：大事にしてた木があったの


小瀬田港のケタンキ

その成長を見守って

松本：俺ね、平成8年に家を建てたの。そしたら庭に杉の芽が出た。で、白谷に、同じタイミングで芽生えた杉があってね、なんか愛着が湧いて

さ、うちの庭のヤツはどんどん伸びて、樹高 8mぐらい、太さは15cmぐらいになった。でも白谷のやつは、未だに高さ50cm、太さ1cmなの。この違いにすごく驚いていて。それ以来ずっと見守ってたんだけど、それが去年夏の干ばつで枯れちゃった。これはショックだったね。いつもツアー中にね、こいつが 500 年もすれば立派な杉になっているから、500 年後また見に来てくださいねっていってたんだけど、枯れてしまった…。

市川：悲しいねぇ。

松本：今気になってるのはランドの、ひげ長老のちょい手前の切り株にすくすくと成長している杉。条件はいいよ。鹿にも食われないし、日当りもいい感じ。けど、写真ぜんぜん撮ってないなぁ。あれは今、気にして見続けてる。

市川：20 年前からずっとあるけど、ほんとにあれ、成長しない。成長しないやつってほんとに成長しないよね。

樫村：そう言われたくないよね。

一同：爆笑

松本：でも見ると少しは伸びてる感じはするんだけどね。

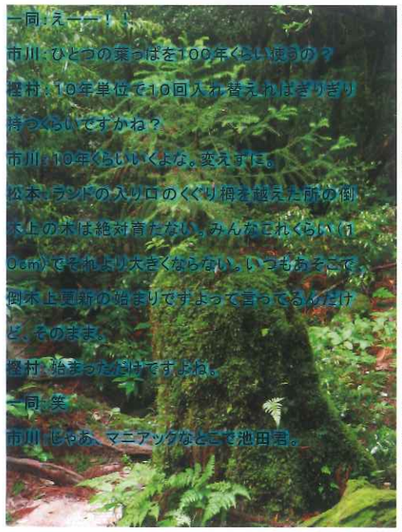
樫村：やっぱり枝は広がってきますよ。

市川：えらいのはそこでなかなか死なないんだよね。屋久杉は。成長を停止してもさ、そのままずっと粘り越しで・・・。実は葉っぱもあんまり入れ替えてないんじゃないか？

樫村：そうですね。そんなことやってたら死んじゃうでしょうね。

市川：だから同じ葉っぱをめちゃくちゃ長く使ってるんじゃないか、あれ。

樫村：青森ヒバなんか親指くらいの太さで100年とかありますからね。


ランドの切株杉

知られざる木に歴史あり

池田：そうですね、ラン好きからすると魅力な木はけっこうありますね。白谷雲水峡の飛流歩道にあるツガに「オサラン」とか「セッコク」とかがついていて、6 月に咲いてるんですよ。双眼鏡で見るとわかる。それで「あそこに花が」って言うと、お客さんがぽかーんとしてる。

一同：爆笑

池田：食いついてこないという・・・。そういうのはあります。笑

樫村：食いついてこないところで自分が喜んじゃう。

松本：でも、食いついたらやばいだろ。それはマニアだから。

池田：けど、だいぶ上なんで。見るだけですね。同じように前のマウンテンバイクの安房コースの船行神社の木がやっぱりすごい。アオネカズラ（シダ類）がぶわーっととりまいてて、その中にキバナノセッコクっていうやつとボウランってやつがぼわーっとついてる。神社はプロテクトエリアだから、ぱちあたりにこう取る人なんかまぁあんまりいないだろうから、長年そこで育っているという。そのすぐ横にまた、マツバラン（シダ類）っていう大株が育っていて、いいんです、そこは。

松本：船行神社の辺はすごいよね。あの通りにある木はすごいよね。

池田：神社ってほら、基本殺生禁止だから珍しいのがあるよね。

松本：船行神社の境内の杉で何年くらいだろうか？

市川：あれはね、600年とか。

池田：いいサイズですよね

市川：神社の脇の看板に書いてあったよね。

樫村：偉い人が植えた木とかって・・・植栽されたもので立派なやつってないですよね？

松本：ランドの前にいっぱいあるよ。皇太子さまとか。

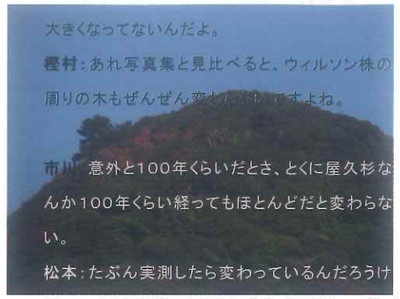
樫村：かつての偉人が、ですよ。笑。西郷隆盛とか。

松本：あとウィルソンさんが植えたとかなぁ。そんな話はないけど。

市川：津森にウィルソン松ってあるんだよ。僕が名付けたんだけど。ウィルソンさんの写真（ウィルソンの屋久島 100 年の記憶の旅路／KTC 中央出版　古居智子・著）に写ってるやつ。

樫村：見つけたんですか？

市川：見に行ったんだよ。こないだ。そしたらさぁ、意外と細いんだよね。100年経ってもあんまり



大きくなってないんだよ。

樫村：あれ写真集と見比べると、ウィルソン株の周りの木もぜんぜん変わらないですよね。

市川：意外と100年くらいだとさ、とくに屋久杉なんか100年くらい経ってもほとんどだと変わらない。

松本：たぶん実測したら変わっているんだろうけど・・・。100年経ったらこれくらい（両手いっぱい）太くなるんじゃないかというイメージがあるから、これ（直径10cm）くらいがこれ（直径20cm）くらいになりましたっていう話かもしれないんだけどね。

市川：ウィルソンさんの写真のときから、津森で抜きん出てでかいからさ、あれが100年経ってたらさぞ大きなウィルソン松なんだろうと思ってわざわざ見に行ったんだけどさ、これかよ！みたいな・・・。これかよっていったら申し訳ないけどね。それがまあ、生きてるって言うのは、かなり過酷なんだよね。あの津森のてっぺんっていうのは。

樫村：海岸沿いのストレスはすごいでしょうね。

市川：大きくなれなくて、当たり前なのかもしれないね。

松本：100年生き続けていることはたしか。

渡部：今でも目立ちますもんね。

市川：あの当時、松切らなかったんだよな。なんかな。松だけ残ってるんだよ。写真見たら。

松本：なんでだろう。

市川：なんかあれなんじゃないの。焚きもんにむかなかったんじゃないの。

松本：松脂はよく燃えるから。

市川：ヤニが多すぎて。

樫村：釜が傷むとか。

市川：すすけるとか。

松本：昔うち五右衛門風呂だったから、薪を海岸に拾いに行くんだけど、海岸の薪は釜を傷めるよって言われた。塩を含んでいるから。

市川：そいうのはあるのかもね。でも周りの木みんな切ってるから、海岸の木だっていう理由ではないんだろうな。きっとなぁ。

松本：だから、松になんかあったんだろうね。そんなに困ってしまっていたのに、やっぱり松を切らないっていうのは、ただ釜が傷むとかそういう理由だけではないんだろうね。志戸子のガジュマルは切らなかったのかな？ガジュマルは薪には適さなかったんだろうね。

サビも出ちゃう。

の。アリドオシって。

樫村：屋久島常識だと50cmくらいですよね。

市川：巨大といっても細いんだよね。アリドオシからすると巨大なんだけど、普通の木の巨大とはまた違うんだ。

松本：巨大って言うからすっげーの期待して行ったら、これ？っていう。笑。普段はこうなんですよっていうのを見せてからじゃないとね。

池田：4倍体くらいですかね。笑

市川：4倍体といえばさ、昔釈迦杉の下にさ、巨大なキリシマテンナンショウがあったんだけど、あれこそ何倍体じゃないのかってやつで、女性がしゃがむと下に入れた。

渡部：もうないんですか？

ん。どこを

ないの？

ぁり

本のガジュ

全部で80。

からすぐそ

ですけど、

けっこう幅

ってて、い

たわけでも

なと思って

面川の板

さ、すっげ

「威風堂々」

もう枯れて

番最後に

。たしか。

ったり。「大

っかいシイ

たやつだか

じられない

150cmを

池田：去年は見なかったな。

樫村：疲れちゃったんじゃないですかね。

市川：そういう意味ではさ、半山にジャイアントわらびっていうのがあってさ。わらびも150cm くらいになるんだよ。

一同：ほんとですか！それはすごい！

市川：そう、ひゅーっと伸びて丈が150cmくらいになるの！最近なくなったなぁ。鹿に食べられたかな。

樫村：比較した上ででっかいなって思うのは、白谷の椿なんてみんなびっくりしますよね。山茶花とか普段の庭木で見ているようなものは。

松本：山茶花はみんなびっくりするよね。

松本：垣根の山茶花は過保護なんですよっていつも言うんだけどね。

市川：過保護なのあれ？

松本：日当たりがいいから上に伸びる必要ないわけじゃない。

市川：違うって。刈り込むからだって。はさみでちょっきんちょっきんされるから、しょうがないって横からわき芽がぶわっとでる。

松本：刈るんだけども、あの高さでもやってるけるから OK なわけでしょ？日当たりがいいから。

杜年のまっすぐな木

市川：背の高い立派なツガと言えば、ヤクスギランドの 50 コースにあるツガいいよね。荒川から小花山歩道に入って、急な所を登って行く途中にある。ツガ。

市川：スギなんかよりも、ツガのほうが枝張りがいいからね。

樫村：スギはすぐわきにいろいろ生えるけど、ツガは梢がものすごく大きいから暗いよね。

松本：白谷の奉行杉に行くまでに沢をいくつか渡るじゃない？その一つ目の沢のところに、まっすぐの背の高い杉が4本あるのね。あれは40mいってんじゃないかな・

樫村：結構詰まった感じのとこですよね。あのへんの4本の杉と、ねじれてる根っこの近くに2本根っこが合体してる杉があるんですけど、あういうのは中堅どころは僕は好きなんですけどね。

松本：よぼよぼじゃなく、すこーんといってる。

樫村：七本杉と対照になってる杉とか。

松本：あの杉は見てて気持ちいいよね。

市川：背の高い木というとさ、蛇之口へ行く途中に、まっすぐな木があるんだよね。あれなんだかよくわかんないんだけど、クロガネモチかな。どーんとまっすぐ生えてて、下から見ても葉っぱが全く見えない。熱帯雨林の木ってそうなんだよね。とにかく幹がどかーんと立ち上がって、とんでもない高いところにぱっと枝が開いてるから、下から見てもどこに葉っぱがあるのかもよくわかんない。あれ、ボルネオを思い出してかわいいんだよ。笑。

池田：植栽で言うと、ノマドカフェのプルメリアはでかいですよね。

市川：プルメリアさ、うちに植えたんだよ。ちっちゃい芽が3つついてたんだけど、鹿がみんな齧ったんだよ～。

池田：あれ、毒ないんですか？

市川：食っちゃった・・・。それも芽だけかじった・・・。あれどっかで買ってきたんだよ。あ、ノマドカフェで買ってきたんだ！

一同：笑

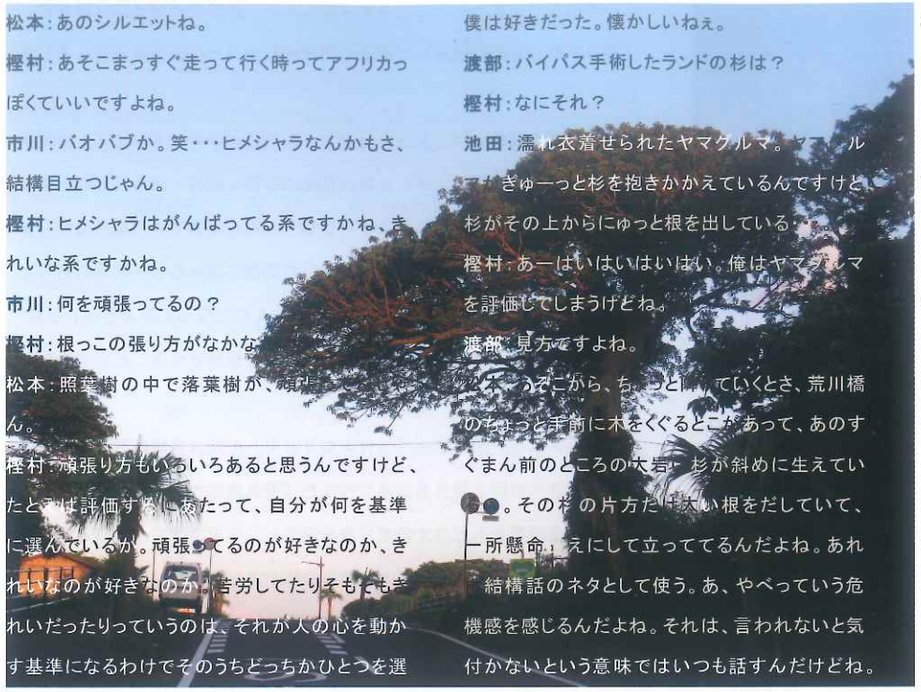
池田：あいつの子・・・か。花がいい香りでいいですよね。

心に働きかける木

池田：今回は風に耐える木がよく挙がりましたね。

市川：最初のケタンキのインパクトが強かったからな。佐野君はサツキだった。サツキといえばヤクスギランドの沢津橋の下のサツキが、水の

夕方の小瀬田のアコウ



松本：あのシルエットね。

樫村：あそこまっすぐ走って行く時ってアフリカっぽくていいですよね。

市川：バオバブか。笑・・・ヒメシャラなんかもさ、結構目立つじゃん。

樫村：ヒメシャラはがんばってる系ですかね、きれいな系ですかね。

市川：何を頑張ってるの？

樫村：根っこの張り方がなかな

松本：照葉樹の中で落葉樹が、頑張

ん。

樫村：頑張り方もいろいろあると思うんですけど、たとえば評価するにあたって、自分が何を基準に選んでいるか。頑張ってるのが好きなのか、きれいなのが好きなのか。苦労してたりそもそもきれいだったりっていうのは、それが人の心を動かす基準になるわけでそのうちどっちかひとつを選べって言われたら・・・

市川：じゃきれいな木ってなんだ？

樫村：黒味岳に登って行く時に、休憩できる大きな岩が標高1600mくらいのとこにあって、その岩を超えたら、左手に高盤岳の頂上が見える、あのでっかい岩の20mくらい手前に岩がまるまる見えて、ちょっとした広場があって、その左手のヤマグルマがきれい。あれ、写真に撮って屋久杉自然館主催の屋久島写真コンテストに出したら一人だけ「いいね！」っていってくれました。笑

佐野：てっきりなんかの賞をとられたのかと・・・。笑

松本：たしかにヤマグルマの枝の張り方って独特だよね。

市川：今度その写真を YNAC 通信の表紙にしよう。（表紙写真参照）

樫村：地味ですよー。笑

市川：地味だといいながら美しいんだろ？

樫村：きれいですよ。見た目の美しい木って主観で選んじゃうから共感を得られないことが多いんですよね。頑張ってますよねっていうのは解説次第でいくらでも相手に訴えかけられるけど。

松本：それは言えてる。

市川：美しさはそれぞれ基準が違うからな。投石の岩屋の手前にさ、ケムール人みたいな杉があ

僕は好きだった。懐かしいねぇ。

渡部：バイパス手術したランドの杉は？

樫村：なにそれ？

池田：濡れ衣着せられたヤマグルマ。ヤマグルマがぎゅーっと杉を抱きかかえているんですけど、杉がその上からにゅっと根を出している。

樫村：あーはいはいはいはい。俺はヤマグルマを評価してしまうけどね。

渡部：見方ですよね。

松本：そこから、ちょっと上っていくとさ、荒川橋のそばっと手前に木をくぐるとこがあって、あのすぐまん前のところの大岩。杉が斜めに生えている。その杉の片方だけ大い根をだしていて、一所懸命。えにして立ってるんだよね。あれ、結構話のネタとして使う。あ、やべっていう危機感を感じるんだよね。それは、言われないと気付かないという意味ではいつも話すんだけどね。

市川：がんばってる系というとさ、黒味行く途中のでっかい山の字書いた岩の先にどてっと倒れたツガがあるんだけど、枝2本が立ち上がってさ、2本に増えたんだよね。あういうのってすごいよね。倒れてなお倍に増えたっていうのには感心するね。あと、白谷の谷にこけてる木な。どうみても、おまえはもう死んでいるって言いたくなるような。完璧にこけててさ、根っこもぶちぶち切れてるのになお生きている。あの粘り腰はすごいよね。信じらんない粘り腰の木があるのが屋久島なんだよ。くじけた人は励まされるんだよ、屋久島に。大事なメッセージなんだよあれ。

池田：屋久島でしか見れないであろう変な木をぼくがひとつ。すっごい地味なんですけど、白谷雲水峡のアサヒビールのベンチの横の山桜がちょっとかわってて、でっかい山桜に15本くらいの山桜が着生してるっていう。ひこばえじゃなくて、ちゃんと根っこが出てて、たぶんサルかなんかが、ぽろぽろ食べこぼしたんだと思うんですけど、ああいうのって、雨が多くてコケが生えてる環境なんかじゃないとたぶんでないから、屋久島ならではなんじゃないかなと。普通サクラって着生しないですよね。

樫村：214林班の看板の前（にあって）で16本桜ですって。

市川：16本も生えてるのか！

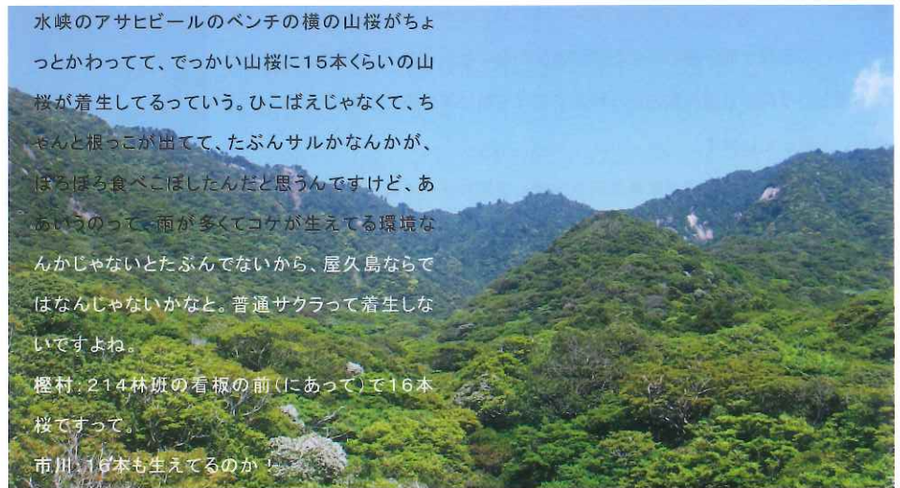
樫村：枝先でサクランボを食べた猿が、幹を降りてくる途中にこぼしていったようにしか見えないよね。

風景を埋めつくす木

市川：話は尽きませんがそろそろ、〆にはいる時間になってきたところで、社長、まとめてください。（時刻は午後 11 時 30 分）

松本：では。（西部照葉樹林のツアー中）海岸の岩の上に立つじゃない。そこで今見えてる森の中に何本木が生えてると思いますか？ってお客さんに必ず問いかけるんだよね。ある意味天文学的数字なような気もするよね。もし、計ろうとしたら、単位面積で何本生えてるか地図上で面積計算やれば出るんだと思うよ。けど、そうではない。圧倒的な木の数。埋め尽くしてる木の景色っていうものが、今日本でどれくらい見えるんだろうか。たぶん、見てる限りが全部木で埋め尽くされている景色ってのはそんなにないんじゃないかって気がするよね。あそこで、その質問を投げかけるのは、別に数を数えろとか、何本ですよって伝えることが目的ではなくって、今見てる景色のなかにたくさんの木があるってことを思ってほしいから、そういう質問を投げかけるんだけどね。で、っていうくらいすごい数の木があるのよ。屋久島には。だから、これがとかあれがとか、それぞれの想いもあると思うけれども、そういうのも含めて屋久島の中にとてつもない木があるっていうこと、それをツアーのときに感じてていただければいいなと思っています。

一同：拍手



ＹＮＡＣは昨年創業 20 周年を迎えることができ、たくさんの方々に祝っていただきました。そのパーティーの席で 20 年間続けてこられたことへの感謝と、10 年後の 30 周年ではまた皆さんとお会いしましょう、と述べさせていただきました。とは言ったものの、10 年後…わたしは 67 歳になっています。50 代の現在ですら体力の衰えを感じているのに、あと 10 年このまま踏ん張れるでしょうか。

最近では特に今までと同じように続けていくことに不安を感じ、何か次の展開を切り開く必要を感じていました。このような時に、ある方から「最初の 10 年は生業として立ち上げる月日、次の 10 年は人材を育てていくこと、そしてこれからの 10 年は地域における重要な役割を担い、屋久島にとって必要とされる企業へと発展させていくべきでしょう」とアドバイスをいただきました。

また昨年は屋久島観光協会副会長という重責を担うことになりましたがその時にも「屋久島のガイド業をリードしてきたＹＮＡＣがこれからの屋久島の観光業を引っ張っていかなければならないし、それにあなたもそういうことをするのに良い年齢になったでしょう」と言われ妙に納得して引き受けたといういきさつがありました。

20 年前ＹＮＡＣは「木を伐らずに見せることで飯が食っていける時代が必ず来る」と言い、そして確かにそうなりました。その結果または反面、ガイド業者の増加、価格の低下、そして昨今では観光客のガイド離れなど、屋久島のガイド業界には 20 年前には予想できなかった課題も出てきました。

これらの課題と取り組むにあたり微力ながらこれからの 10 年間は、ガイド業という枠から観光業という枠まで広げて私にできることを探っていきたいと思っています。

ＹＮＡＣとしては、昨年来事務所を改装し情報スペースとしてサロン化を目指して準備を進めてきました。以前事務所内が薄暗くてとても入りづ

らい雰囲気だと言われたこともありましたが、島内のデザイン企画会社「優水工房」さんに依頼して明るく開放的なカフェに全面模様替えをしました。

『ＹＮＡＣ情報カフェ』はエコツアーの受け付けやアドバイス、自然や観光に関する情報提供。そして屋久島産の緑茶・紅茶・ほうじ茶などのドリンク類、地元食材を使ったスイーツやうどんを提供できる場所になりました。また全国へ一律 1,000 円（税別）で荷物を送れるサービスも行っています。「屋久島に行ったらとりあえずＹＮＡＣに行ってみようか」と言っていただけるような開かれたスペースとして機能させることができたらと思います。

カフェメニューの中でも「ＹＮＡＣうどん」の麺は長崎県五島の濱崎製麺所の手延べ技術と屋久島の水で作った『屋久島銘水うどん（乾麺）』、それに地元産野菜とトビウオのすり身を使うところまではすんなりと決まっていましたが出汁をどうするかで試行錯誤がありました。その時期にたまたま出会ったのが京都のＮＰＯ法人未利用資源事業化研究所の方々でした。（ミリケンフーズ http://miriyoshigen.jp/）屋久島のサバ節・トビウオ・屋久島で養殖されているクルマエビの骨・頭・殻を瞬間高温高圧焼成法で焼き上げ、昆布と干しシイタケで旨みを加えた和風出汁は食材のおいしさを最大限に引き出してくれ「ＹＮＡＣうどん」の力強い味方になってくれました。

店頭では地元農家の村田さんが作った無農薬野菜・無農薬茶の販売も行っています。全国的に最も早く茶摘みを行う屋久島ですが、摘んだばかりの１番茶の「生茶」や２番茶３番茶で作った屋久島産紅茶のネーミングとラベルをＹＮＡＣの若いスタッフがデザインして販売しています。その商品を見た村田さんは「これはいい、飛ぶように売れるんじゃないかね」と喜んでおられました。

また４月には季節外れのタンカンを永田の岩川農園さんで収穫させてもらいＹＮＡＣのお客様向けにフェイスブックで販売告知をしたところ思わぬ反響の多さにスタッフが再度収穫に行ったほどでした。そこで出た規格外の物は加工して『恋するたんかんマーマレード』としてハート型の瓶に入れてカフェに置いたところ、こちらも地元の方々に好評で即完売でした。この話しを農園の方にお伝えしたら「毎年人手がなくて落ちるにまかせていたものを利用して貰ってありがとう」と逆にお礼を言われてしまいました。

「おいしいうどんがあるんだって？　」「今まで来る機会がなかったけどお茶が飲めるって聞いて、初めてＹＮＡＣに来たよ」と入って来てくれる地元の漁師さん、果樹農家さん、同じガイド業の皆さん、そして観光客の方々が「屋久島の自然と地元食材は宝である」とその価値を発見し、出会いが広がっていく場として皆様に愛されるＹＮＡＣに発展していけたら素晴らしいと考えています。

これからも益々ＹＮＡＣの基幹部門であるガイド業を柱にして、人材育成、地域貢献をその時々の状況の中で頑張っていきたいと思っています。

10 年後、創立 30 周年を迎えた時のＹＮＡＣにどうぞご期待ください。

実は、うどんもカフェも…やっています。

松本淳子

ＹＮＡＣカフェのメニューとあたたかいうどんのレシピが決まりました。

❤　麺は弊社のカヤックやダイビングツアーでお馴染みの五島手延『屋久島銘水うどん』。出汁は屋久島産あご、それに「トビウオのつきあげ＋地元産野菜」のすり身団子をトッピングしています。

このうどんが目指すのは「汁をぜんぶ飲み干してしまうほどのおいしさ」です。

おいしい出汁は自分の持っている旨みを主張するのではなく、コラボの相手を引き立てて全体を幸せにしていこうという気概を感じさせる真の大人、まさに素材を喜ばせるのが『出汁』です。

❤そしてうどんの後のデザートでこの春一番人気だったのは「枇杷プリン」です。昨年までは地元産の枇杷を食べるたびに「このおっきい種さえなければどんなにいいか」と思っていたわたしはバチアタリでした。

今年はその枇杷の種に詫びを入れて「ＹＮＡＣ枇杷プリン」の香り付けに大活躍してもらいました。アーモンドと同じバラ科だからなのでしょうか杏仁豆腐のような香りが立ちます。もちろんお客様には「この香りは枇杷の種」であると種明かしもします。トッピングは枇杷のコンポート、ソースはタンカン果汁の酸味をいかして作りました。

また夏に向けてサバベースの冷やしうどんと屋久島産紅茶ゼリーのレシピも決まりました。更には今年もたくさん収穫できた我が家のスモモといま対話をすすめていますので梅雨明け時にはさっぱりとしたおいしいスモモデザートができているはずです。

近くの素泊まり民宿に泊まり、これから船に乗って帰るお客様が９時半頃に「うどんできますか？」といらっしゃいます。屋久島の最後の時間をＹＮＡＣで過ごしていただけるなんて、本当に嬉しいことです。

復活！チューブラフティング！

渡部 幸

「チューブラフティングって何？」
それは、膨らませたタイヤチューブに乗っての川下り。
それは、川をまるごと楽しむ旅！

2014年復活を遂げたチューブラフティングツアー。
今回は、そのツアーの全貌をお伝えいたします！

まずは装備を整えます。

改良版チューブは座布団付きだから、多少の岩場も怖くない！

いざ出陣！
まんまるのタイヤチューブはうまく漕がないとくるくる回ります。一寸法師って実は凄腕だったんですね。

普段はなかなか見ることのできない視点での風景は格別です。スノーケルを使って淡水魚の目線で一緒に泳いだり、飛び込んで淵の深さを感じたり、川と一体になれるポイントもたくさんあります。

時折、現れる早瀬にテンションも足もあがります！

浅瀬が続く、宮之浦川。水量が少ないと、チューブに乗ったまま川を下るには困難な場所も・・・。これはもしかするとYNAC初となる（？）雨を待つツアー！となるかも？

空の青、森の蒼、川の藍と三拍子揃った三碧の半日ツアー。
一日も時間は取れないけど、屋久島でもっと遊びたい！というときピッタリのツアーです！

チューブラフティング・ツアー詳細

開催時期：5月～11月
午前の部：8：30～12：00 午後の部：13：30～17：00
集合場所：YNAC事務所
対象年齢：小学校高学年以上
準 備 物：水着、着替え、タオル、日焼け対策品
定　　員：1名～4名
料　　金：お一人様￥8,640（税込）
　　傷害保険・装備レンタル料込
レンタル装備：ヘルメット、ライフベスト、グローブ
　　ウエットスーツ、スノーケル、渓流タビ

IN THE BEGINNNG
新たな始まり

Trainee tour-guides in 2014

30代からの新スタート。
転職を決意したほどの、ガイドの魅力とは何なのか？
研修生2人に胸の思いを語ってもらう

原点

福留 千穂

「ガイドの仕事がしたい！」

そう思い始めたのは，実は遠い昔のことではありません。社会人になってからです。以前は，小・中学校で養護教諭（保健室の先生）をしていました。

たくさんの子どもたちと出会い，話を聞きながら，弱った心を受け入れるとき，自分の心のエネルギーが小さくなることがあります。

そんな時，自分自身が元気になれるのは，自然の中に身を置くことでした。風景や聞こえてくる音に，穏やかな心を取り戻し，小さな生き物，大きな木々の姿に，励まされるような，不思議なパワーをもらえます。

この自然の面白さや不思議さを，伝えられたら，どれだけの人が，元気を取り戻せるだろう…。

屋久島は，力強い姿の山々，豊かな水量の滝，透き通った水の川，緑豊かな森…。感嘆なのか，歓喜なのか，興奮なのか，よくわからないため息がこぼれてしまいます。

4月から研修を受け始めて，変化していく山や森の様子を，じっくりと感じることができ，改めて，「生きている」ことを感じる毎日です。
春の新緑の山々は，鮮やかな緑の葉を一斉に出し，そして，次々と花を咲かせます。大きい木々も，日陰の小さい花も，険しい岩場に咲く花も，みんなエネルギーに満ち溢れています。なんてすごいんだ！！

そう感じたとき，やっぱり，あのため息が出てしまうのです。生きるエネルギーがひしひしと伝わってくる島なのだと確信しました。

鹿児島の山の中で育った私は，川で遊び，やぶをかき分けて歩き，虫を追いかける「少女」ではなく，まさしく「少年」でした。

封印していた少年の心を開放し，屋久島の自然をもっと探り，たくさんの発見をしていきたいです。

屋久島に今いられることは，偶然ではなく，必然的な出会いの連続でそうなったのだと感謝し，今，YNAC で，少年の心を持った先輩方についていきながら，屋久島の一員になれることを幸せに感じます。
まだまだ気付いていない部分がたくさんあると思いますが，固められた固定概念の壁をガラガラと壊しながら，たくさんの発見をしていきたいと思います。
どうぞよろしくお願いいたします！！

「1流」への途上― On the way

佐野 良介

◆「なんでYNACに来たの？」

よく聞かれるが答えは1つ。「1流のエコツアーガイドを目指してきた」からだ。

7年越しの夢があった。それは「たった1日の自然体験が、お客様の『自然観・人生観』まで変えてしまう1流のガイドになること」。夢を叶えるには、どうしてもYNACで働くしかなかった。

私が夢を抱き、ガイド修行をスタートすることになった2006年春。YNACツアーを体験した。松本さん鷲尾さんに照葉樹林のご案内いただき、以後私の自然観がかわった。九州の家に帰り、「ただの景色」が「スダジイの新緑、花」だったと気づいた瞬間、私の内なる景色が変わった。分断されていた身近な自然と私がつながり、スダジイの生命力が感じられるようになった。世界はより豊かに輝きだしたのだ。

夢抱え岐阜のガイド養成学校に行った。ここでガイド技術（インタープリテーション）研究の第1人者である小林毅教授に指南して頂いた。その後、私は新潟の自然学校でインタープリター（自然解説者）、米国アラスカ州で現地の野生動物ガイド兼コーディネーターをしてきた。

こうした全国の自然学校、ガイド会社をまわる経験の中で「YNACのガイド技術の高さ」を再確認した。全国でYNACを越えるハイレベルのガイドはいなかった。「並のガイドの壁を突き破りたい。挑戦するのは今しかない。」

昨年2013年6月。7年ぶりにYNACの門を叩いた。「憧れのガイド」集団の一員になるためだ。夢を応援してくれた恩師はもういない。青空の向こうから見守ってくれるはずだ。YNACへは片道切符しかなかった。ただあるのは、誰にも負けない熱意だけだった。

◆YNACでは若手スタッフ養成（＝ツアー熟成）に1年以上をかける。つまり、お客様は1年以上ねかされたYNACツアーをご賞味頂いていることになる。

1流のエンターテイメント作品「ものの姫」が構想16年、製作期間に「3年」もかけ、熟成させたように。

YNACは単に「日本エコツアーの草分け」と評されるだけでない。屋久島の自然の不思議をひもとく。その先には大きな感動がまっている。このYNAC ツアーの秘訣は、独自の調査、研究書を読み重ね、「わかりやすく、面白く情報を編集する」ことにある。

だからふしぎと「お勉強会」にならない。同じ自然でもYNACガイドにかかれば、目からウロコの自然体験になる。

これらが、「道案内だけ、世間話だけ、耳学問をそのまま話すだけ」のガイドと一線を画す点だ。

「1流の誇りとこだわり」。20年追求してきたから、いまのYNACがある。

◆オススメ1 「静かでゆったりツアー」

お問い合せで「ゆっくり自然を楽しみ、自分と向き合う時間をもちたい。」というリクエストが多い。私のオススメは「安房川リバーカヤック」

屋久島一河口が広い川でゆったりカヤック。街の喧騒をはなれ、深い森に包まれた清流をこいでいく。聞こえるのはパドルを漕ぐ音だけ。そんな静寂をぜいたくに堪能できるツアー。焚き火を囲み他のお客さんともすっかり打ちとけ、リラックスできる

◆オススメ2 「アクティブなツアー」

屋久島は「岩の島」で雨の島。当然、何百の沢、滝が岩肌や深い森を縫っている。秘境はココにこそある。

「山頂のみ目指すピークハンター」「縄文杉のお参り登山者」がきびすを返すべき場所、それが「屋久島の沢」だ！

整備された登山道をはずれ、ガイドのみ知る「道なき道」をゆく。その先に「屋久島の秘境」が待っている。多雨が彫刻した巨岩の絶景。

ご希望とコース、天候により、「天然すべり台」「1m－9mの滝飛び込み台」「アクティブな滝登り、岩登り」も可能。夏はYNAC本格的な沢登りがオススメ。

◆お客様にプレゼントしたいツアー

「たった一つの屋久島体験」を、お客様にプレゼントさせて頂きたいと思います。早く1人前になるように研鑽に勤めます。よろしくお願いします。

蟲部(むしぶ)

池田裕二

第１回　それは誤解です。

同業者から、こんな質問を受ける。

「専門はなんですか？」

自然ガイドは、何らかの「専門」分野を探求したほうが、それを切り口に自然を観察・研究する目を鍛えることができる。もちろん分野を問わず「博物学」に精通するのが一番だが、得意分野はあったほうが良い。
私の場合は「変ないきもの」が好きなので海・山・川にとらわれることなく、「変ないきもの」を探求していこうと思う。
専門、「変ないきもの」。
いきものをじっくり観察してみると、虫やクモやヘビなど、一般的に嫌われがちないきものだって、よくよく見てみると色彩や造形が美しく、あるものは有機的であるものは無機的でメカニカルなデザインをしている。知れば知るほど不思議な生態などカッコいい秘密を持っていて、味わい深い。

最近は虫採りや魚釣りでさえコンピュータゲームの仮想現実の世界で行われ、ウェブで調べた知識だけは一丁前のくせにクワガタムシも触れない小学生男児がいる。
成人男性で、ゴキブリやヘビやクモを見て飛んで逃げ、奥さんに「やっつけて！」と叫ぶ弱腰もいる。
ええんかいそれで!!
人といきものの関係が希薄になってきているのは事実なのだろう。ゆゆしき事態だ。
とにかくいきもののもつ面白さを、自然ガイドの目線で伝えたい。そしてなるべく多くの人にその魅力をわかってほしい。
いきものの魅力を楽しむことができ、偏見をクリーニングできれば、世の中はいきもの好きが増え、もっともっと楽しくガイドができると信じている。
この蟲部シリーズではいきものの魅力に迫っていきたい。
第 1 回はもっとも身近な生命体のひとつ、昆虫をはじめとする節足動物から。

3 億年モデルチェンジ無し

究極(アルティメット)生命体のグッドデザイン賞【ゴキブリ】

いきものの世界ではモデルチェンジをすることなく、およそ3 億年長い時代を生き抜いている猛者がいる。
みんなに嫌われる、ゴキブリだ。
現生人類の歴史はせいぜい 10 万年。3 億年にはお足元にも及ばない。前々からゴキブリはすごいと思っていたが、大っぴら言うと(今以上に)変わりもの扱いされるので心の中にそっと、とどめておいた。それをこの機会に発表したいと思う。
ゴキブリは古生代の地層から産出した化石からわかる形態と、現代の種類の形態はほとんど変わっていない。つまり地球上で生きていく上で都合がよいデザインといえる。
走る・隠れる・飛ぶという、野生において重要な高い身体能力を持っているだけでなく、優秀な繁殖能力を持った潜在能力の高いいきものである。恐竜が大絶滅した時代もヘッチャラで、現在世界中広くに生息しているゴキブリ。
一般的には不潔ないきもの、というイメージが強い。
「それは誤解です」。
一部の種類のゴキブリ、台所やゴミ捨て場で見かける茶色いチョコマカしたのや、黒光りするのは、清潔感はないイメージだ。ただしそれは人間の残飯狙いの結果であり、彼ら自体が不潔なのではない。よく考えてみよう。雑菌がウヨウヨしていそうなゴミ捨て場で、ゴキブリが生き生きしているのはなぜか？彼らの体には雑菌をものともしない抗菌性があるのだという。
それに、4000 種ほど知られているゴキブリは森林棲のものがほとんどを占め、生活圏はカブトムシとさほど変わらない。不潔なヒト生活圏に入り込んできたものはほんの数種類だけである。

観察におすすめの屋久島産ゴキブリたち

↑ダンゴムシそっくり「ヒメマルゴキブリ」
パワーE　スピードD　特殊能力　丸まって防御態勢をとる
ツアー中遭遇率：1%以下
朽木に棲む小型のゴキブリで、大きさ、形、動きといいダンゴムシそっくりでベリーキュート。
古生代の海洋生物「三葉虫」ファコプスのよう。

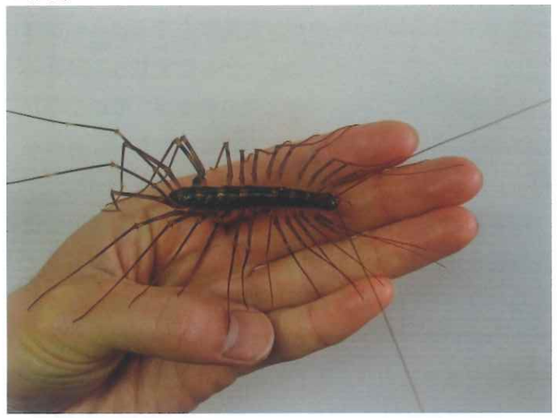
↑とにかくでっかい！オオゴキブリ　Giant cockroach
全長 30mm～40mm　台所にいるゴキブリよりかなりボリューム感がある。動きは鈍い。朽木を食べる。
パワーD　スピードD　特殊能力　土に潜る
捕獲難易度　超カンタン
ツアー中の遭遇確率　3%

A･･･超スゴイ　B･･･スゴイ　C･･･人間並み　D･･･ニガテ
E･･･超ニガテ
捕獲難易度･･･素手またはプラケースを使用した場合。
ツアー中遭遇率･･･森歩き、登山などでの遭遇率

足いっぱいのインパクトプレーヤー

ゴキブリに次いで嫌われやすい生き物は「足がいっぱいのムカデ・ヤスデ類」だろう。多足類、といわれるグループだ。
その中でも嫌われ者の王者といえばゲジだ。さらにオオゲジという日本最大種に至っては、その嫌われようはゴキブリをもしのぐかも知れない。まさに嫌われ者の王者。
巨大で足が多いことに加え、そのメカニカルな動き、感情移入できそうにないデザイン、そして普段あまり遭遇しないので、ばったり出くわした時のインパクトの強さ。
とてつもない破壊力を持った危険生物のように思えてしまう。
「それは誤解です。」

実は意外とドンくさい生き物のオオゲジ。触っても噛まず、スピードもそれほど速くないので子供でも捕まえられる。
自然界ではコオロギなどを捕食しているようだ。
民家の倉庫や風呂場など、やや湿った暗い場所に時々現れることがある。



↑ゲジの日本最大種、洞窟性で樹の洞などにもいる。
嫌われ者の王者「オオゲジ」　Giant house centipede
体長 70mm　脚を広げた大きさ(レッグスパン)は 200mm達する。
パワーE　スピードD　特殊能力は無いが、皆に恐れられる。
捕獲難易度　超カンタン
ツアー中の遭遇確率　1%

なんだかよくわからない生き物もいます。
代表格がザトウムシ。
白谷雲水峡や西部照葉樹林などの森歩きツアーで、温かい時期、雨上りの日によく遭遇する足の長いクモみたいな生物。
最新の学説によるとサソリに近いとする考えもあるようだが、毒針は持たない。ザトウムシという名はあまりに認知度が低く、解説もしづらい。英語で「あしながおじさん」というらしいので、いっそ和名を「アシナガオジサン」にしたらどうか。
魚に「オジサン」という種がいるので有りかと思う。
歩き方がジブリの「まっくろくろすけ」「ススワタリ」に似てユーモラス、意外と女性からカワイイ！と言われる注目の蟲。

↑嫌われキャラから愛されキャラへ。私のあしながおじさん「ギンボシザトウムシ」
Daddy long legs / Harvestman
パワーE　スピードC　捕獲難易度　超カンタン
ツアー中遭遇率：50%

【こいつは本当に要注意】猛毒です、スズメバチ。

迫りくる恐怖のラジコンヘリ「オオスズメバチ」
Giant hornet、Vespa
パワーA　スピードA　持久力A　特殊能力　猛毒の毒針
捕獲難易度　ふつう
ツアー中遭遇確率　5%

日本最強の昆虫。
山歩きや農作業時において、クマに襲われるよりハチに刺されて死亡するケースが多い。厚生省のデータを見ると、本種または、より攻撃性の強いキイロスズメバチに襲われるケースが多いという。刺されたらとにかく病院へ直行です。
春から秋にかけて、気温が 20 度程度の季節はスズメバチの活動期。森歩きなどで遭遇することがありますが、単独で飛来する個体は偵察しているだけのことが多く、あわてず静かに追い払うか、そろそろと逃げてしまうのが吉。
飛来するときのブーンという羽音と翅が巻き起こす旋風はまさにミニチュアのラジコンヘリ。デザインもカッコいい。
イタリア・ピアッジオ社のスクーター「Vespa」はスズメバチの学名からとったもの。「ローマの休日」で愛しのオードリーが乗っていたあのバイクがそうです。
ただ、ビンテージの Vespa は方向指示器がついていないので、日本で乗るにはハンドシグナルが必要。めんどくさい。

いかがでしたでしょうか。
嫌われ者でも、正体がわかってくれば、一安心。もう平気。

小学生の時、同級生の M 君はお母さんが大の虫嫌いだったそうで、「うちでは虫飼えない」と言ってました。そのうち虫が平気だった M 君は虫嫌いになりました。
私の母は生き物が得意ではありませんでしたが、私が捕まえてくる生き物を、子どもと同じ目線で観察してくれました。
正しいかどうかはわかりませんが、実感として、生き物嫌い(生き物好き)は親から子へ後天的に遺伝すると考えます。
偏見を持たず、生き物を観察することは、大切なことだと思います。とくに幼少時代のその経験は、自然科学に興味をもつきっかけとなるでしょう。

なかなか今回のような生物をじっくり見る機会もないと思いますが、注目してみるとその生態やカタチにひき込まれます。とってもワンダー。
今回は奇虫や毒虫など、嫌われ者を中心に掲載しましたが、ぜひシリーズ化して様々な生き物の魅力を伝えていきたいと思います。

プアマンズ・ストロボ

樫村精一

風景写真は難しい。４年かけて、そう理解できた。なので、小さいものを撮っていこうとすると、昆虫や植物図鑑によく載っているような、ハッキリした写真が欲しい。海野和男（うんの かずお）さんやら岩合光明（いわごうみつあき）さんのように、狙う被写体が「昆虫」とか「猫」とか、特定の種類に限定されていると、それらを撮る為に凝らさなければならない工夫についても、知恵と経験を積み重ね易いんじゃないかな、と思い、マジメにコケ写真を撮って色々と見せてまわっている。

↑ホソバミズセニゴケ。破裂した蒴。毛玉は直径 約 1mm

まずカメラとは面白い道具で、顕微鏡みたいに使える。しかもそれをその場で再生、目で見て確認できる。なんて便利な道具でしょう。現場で説明できないような細かい自然の様子を、その場で巧く撮って見せれば、こちらも話しを広げやすい。中谷宇吉郎（なかや うきちろう）（世界で初の人工雪を作った人）が言う。「本当に面白い点は、事実の羅列にあり、議論にはない。事実の羅列の面白さの中に、美を求めよう。知らぬ事を聞く、というだけの満足を与えれば、それでよい。」実にシンプル。「事柄が明白であれば、言葉は自ら従う」とはモンテーニュの言葉であるが、初めから、言いたい事をバシッと見せてしまえば、使うべき言葉は多くない。

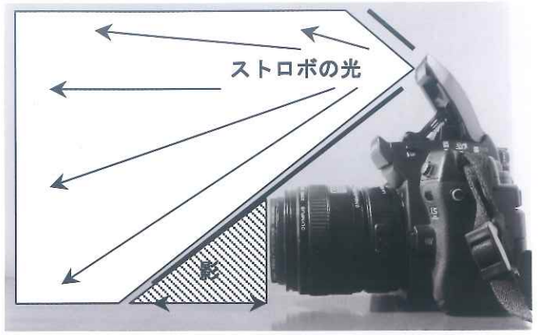
ここで、「面白い点」を「美しく」見せるという所が難しい。葉の表面の撥水、昆虫の四肢や触覚の先端、コケの細胞、花の模様、雌しべの成熟。こういうものにキャプションを付けるわけである。1mm 程の小さな作りが如何に精巧なものか。自動車を作るほうが簡単かもしれないぞ。細かな工夫にどんなメリットがあるのだろう。そういう個々の工夫の集合が、その生物だけでなく、他の生物にも影響を与え、屋久島の特徴を練り上げている。

小さな要素の特徴から、その集合体になる物の特徴を理解するスタイルを還元主義という。素材を並べて料理の味を想像するような方法であって、完璧とは言えないものの、ひとまず目の前の自然を理解するには便利な方法である。(余談。1＋1 が 2 以上になった場合、2 以上の「計算できなかった部分」を「創発（そうはつ）」と呼ぶ。組織の持つ、個人の力の集合に留まらない、予測不能の力や現象のことで、これが「自然の面白さの源」だと私は思っている)

で、その小さな要素を、条件が刻々変化する森の中でバシッと撮るのは難しいので、ここでやっと表題の「プアマンズ・ストロボ」に辿り着く。直訳「貧乏人のストロボ」。インターネットでそのまま検索できます。

↑牛乳パックでも作成可。これはプラダン製。

要するに、カメラレンズの前面すべてに、しっかりとストロボの光が届くような仕掛けである。



↑　付属ストロボでは、レンズ前 5cm 周辺までに影ができる。

最近は、レンズ前 1cm 付近で撮影できる機種が多い。そういうカメラほど高倍率で綺麗に撮影できるから、レンズ前に光を集める道具や、レンズ前を直接照らすような電気スタンドタイプのストロボが、よく売れるようになるだろう。まだまだメジャーではないけれど。

そういう「マクロ撮影」には、普段見えないようなものをしっかり見るという楽しみがある。でも森の中は暗いし、風なんかで被写体が動くし、そもそも昆虫を撮ろうと思ったら、じっとしてくれてないと困る。明るい被写体はパッと撮れるけど、暗いとできない。なら照らすしかないね、というわけで、便利な道具に「リングフラッシュ」や「ディフューザー」というものがある。でも１万円ぐらいする。壊れたら痛い。

ゆえに「プアマンズ」ストロボである。安く、かつ軽い。200 円程度で出来る。カメラ側の設定は、ホワイトバランスがフラッシュ、シャッタースピードは 1/160、絞り f16、光量は 1/4～1/16 ぐらい。設定は、説明書を見て、頑張っていじってくださいませ。

↓　リングフラッシュ。レンズ周辺から被写体に向けて光が出る。

↑アブラムシと　アリ。ヨモギの茎に着いていた。

↑イチゴの葉を丸めて、中に隠れていたクモ。2cm ぐらい。

小さなシダ→
コケシノブの葉と
新芽のゼンマイ。
ゼンマイ直径 1mm。

蛾に名前をつけちゃいました!

市川 聡

アカネシロユミクチバ（新称）

私事ですが四十の手習いで弓道を始めました。この年で弓道を始めたのは、もちろん原田知世の「時をかける少女」での弓道姿に憧れたせいであり、先日もう少し年下のお客様は、富田靖子の「アイコ十六歳」に憧れて最近弓道を始めたとおっしゃっていました。中年男子の弓道とはそのような甘酸っぱい青春の結晶なのです。ただもうかれこれ８年も続いているのは、甘酸っぱい思い出だけではなく、的に当たった瞬間、静かな弓道場に響く乾いたパンッという音が、なんとも心地よいからに他なりません。

昨年、春牧区の健康の森公園に、新しい弓道場が完成しました。これまでの弓道場には遠的場（射距離 60m）がなく、近的場（射距離 28m）だけだったので、屋久島町弓道部としては、悲願の弓道場の完成でした。実はこれが私と蛾との出会いのきっかけとなったのです。

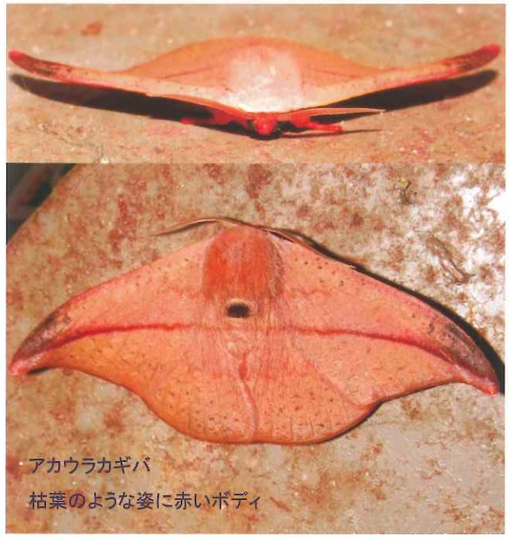
弓道の練習は、夜行っています。趣味とはいえ屋久島町弓道部はここ１０年、郡体では負け知らずで、県体でも優勝経験がある県下有数の強豪チームです。４月からは県体が終わるまで、基本的に毎晩練習があります。この新しい弓道場では強力な投光器が的を照らしてくれます。これが大量の蛾を弓道場に集めることになりました。まさに蛾で溢れかえるといった様相です。最初は迷惑がっていたのですが、ある日、枯葉そっくりの蛾がいることに気がつきました。つまんで捨てようと思ったら、なんと飛んで逃げるではありませんか。それだけではありません。身体は実に色鮮やかな朱色をしています。ここでこれまでの蛾に対するイメージが一変しました。蛾は夜飛んで誰も見てくれないから地味な姿をしていると思っていたのですが、よく考えてみれば明るい昼間にじっとしているためには、それなりの工夫が必要です。そこに実に多様な姿の蛾が生まれることとなったのです。

驚くべきことに現在日本で知られているチョウ目（蛾とチョウを含む）の種類数は、約４８００種といわれていますが、そのうち蛾が４５００種を占めています。鹿児島県内だけでも約２０００種（福田ら、２００９）の蛾が知られており、世界は蛾で溢れているというのが良くわかります。蛾マニアからすると蝶は蛾の一部に過ぎないそうな。ちなみに蛾と蝶の違いはというと、触角が蛾は櫛状なのに対して、蝶は棍棒状となることです。

そうやって一度関心を持って蛾を眺め始めると、実に美しいもの、奇妙な姿をしたもの、様々な蛾がいることがわかり、あっというまに目から鱗が取れてしまいました。蛾というと鱗粉が嫌いという方も少なくないと思いますが、全ての蛾が鱗粉にまみれているわけではなく、羽が透明なものや毛むくじゃらでぬいぐるみのような愛らしい顔をしたものもいます。蛾のマニアにとっては、この「もふもふ」感がたまらないわけです。

２０１３年６月、私の蛾の写真収集がはじまりました。蛾というものは羽を広げて留まるものが多いため、写真撮影にはうってつけです。その上一度留まってしまうと、じっとしているので簡単に写真を撮る事ができます。なぜか光に集まってくるのですが、明るい所に来てしまうと昼間と勘違いしてじっとしてしまうとか？ちょうどこの５月で丸一年を経過し、約４００種の写真をゲットしました。これだけでももう日本の蝶の種類数を超えています。屋久島町弓道場恐るべしです。

蛾の写真を撮影するのは簡単ですが、名前をつけるのは大変です。特に最初は図鑑を最初から順番に当たって行くという途方もない作業をしながら名前を探しました。今ではある程度どのグループの蛾か目安がつくようになったので早くなりましたが、それでもなかなかわからないものも多いのが実態です。そこで大学の先輩で千葉県立中央博物館の学芸員として水生昆虫の研究をやっている倉西良一さんに教えを乞うたところ、沖縄で蛾に詳しい木村正明さんを紹介して頂きました。今ではわからない蛾は、木村



アカウラカギバ
枯葉のような姿に赤いボディ

オオスカシバ
翅は透明で見えない

シタキドクガ
もふもふの顔につぶらな瞳

さんに教えてもらっています。

お送りした不明蛾の写真の中で、9 月に撮影した 1 枚の写真が木村さんの目に留まりました。気になる蛾がいるということで、調べていただいた結果、なんと日本初記録の蛾ということが判明しました。新種となると記載するのに多くの時間と労力をかけなければなりませんが、日本初記録というのは、簡単に報告できる上に和名をつけることができるという、実においしい発見です。

実は私は蛾の写真しか撮っていなかったのですが、虫の知らせか、なぜか唯一この蛾だけは採集してフィルムケースに保管していました。ここは自分で自分を誉めてやりたいと思います。生態写真だけでは発表できないということなので、標本を千葉県立中央博物館に送り、倉西さんに展翅してもらい、その写真を添えて「月刊むし」という雑誌に発表することになりました。

学名を *Sympis rufibasis* Guenée1852 という、ヤガ科シタバ亜科クチバ類の蛾です。台湾、中国南部からインド～オーストラリアの東洋熱帯に広く分布し、ムクロジ科のリュウガンやレイシなどの果樹を食草としています。前の翅の付け根が美しい茜色をしており、翅を広げて留まっている姿は、中ほどに白い筋が弓のように入っています。弓道場で発見したということもあり、名前は「アカネシロユミクチバ」と名づけました。めでたく３名共著で「月刊むし」６月号に掲載されましたので、興味のある方は是非ご一読ください。昨年は９月、１０月、１１月と３ヶ月続けてそれぞれ別個体が弓道場に来ました。屋久島にもリュウガンやレイシは植えられていますので、これが無事越冬できて屋久島で定着しているかどうかが、今年の楽しみです。

ところで図鑑を見ると蛾の分布地の記載に必ずといっていいほど屋久島が出てきます。これは１９８０年に渡辺徳氏によって発表された「屋久島の蛾類」という文献が基になっています。この方は宮城県で映画館を経営していたそうで、チリ地震の時には、県興行環境衛生組合長として、特別興行を行い津波の被災者に全額寄付をしたとか。「宮城県の鱗翅類」をまとめた後、屋久島と対馬で蛾の調査に着手し、主に１９７０年代初頭に十数回来島し、１２月、１月を除き、ほぼ年間を通して屋久島を調査し、膨大な標本を持ち帰りました。この「屋久島の蛾類」には９７１種が記録されており、１９８０年当時、他の文献とあわせて１１０８種が屋久島で記録されています。私の蛾写真コレクションもできるだけ近づきたいものです。

《参考文献》

昆虫の図鑑・採集と標本の作り方/南方新社（福田ら、2009）
日本初記録のアカネシロユミクチバ（新称）を屋久島で確認/月刊むし No.520（市川ら、2014）
屋久島の蛾類／日本蛾類学会（渡辺、1980）

ベニモンコノハ
地味な翅を広げると目の覚めるような赤紋が！

イボタガ
蛾女子に人気

Calendar・2013-14

2013

6/3-6 松本 サンゴ調査種子島

6/6 韓国「日本物語」ツアー受け入れ

6/8,9 松本 サンゴ調査屋久島

6/24 松本 屋久島観光協会副会長に就任

6/25-27 小原 佐渡エコツアーガイド養成講座講師

6/28 松本 屋久島ガイド認定制度検討会再開 検討委員に

6/29-7/2 カトウヨガ屋久島ツアー＝YNAC20 周年パーティー参加

7/1 YNAC20 周年記念パーティー 多数の参加感謝します。

7/2,3 市川 NHK文化センター講師で旭山動物園小菅 元園長と同行ツアー

7/2-4 鳥取東高校研修旅行受け入れ

7/9-11 屋久島高校インターン生受け入れ

7/10,11 市川 北海道大学 森林と河川生物調査案内

7/16 小原 屋久島高校環境コース、ヤクスギランド研修講師

7/16,17 JTB小笠原ガイド研修

7/24,25 MBC 沢登り取材

7/25,26 春日部高校・茗溪学園実習講師

7/31-8/2 岡山理科大学教員免許更新講習

8/4,5 愛媛県立西条高校研修旅行

9/6-9 岡山理科大学エコツーリズム技法実習

10/3,4 東京環境工科専門学院スノーケリング実習

10/11-13 JTBF100 周年記念事業下見案内

10/18,19 東京環境工科専門学院スノーケリング実習

10/19-25 市川 第 5 回ブルネイツアー講師

10/29-11/1 松本・小原 岩手県久慈市エコツアー講習会講師

10/30 市川 JONミーティング参加 京都

11/16,17 松本 西表島エコツアーリズム協会アドバイザー

12/1 比留間 ワーキングホリデーでオーストラリアへ旅立ち

12/1,2 松本 サンゴ調査三島

12/6-10 池田・渡部 WAFA 野外救命救急講習

12/11-14 小原 WAFA 野外救命救急レスポンス講習

12/15,16 松本 サンゴ調査種子島

2014

1/18,19 松本 「くしまツーリズム講座」助っ人参加

1/27-30 御蔵島観光協会研修旅行

2/3 渡部 自動車 2 種免許取得

2/4-6 酪農学園大学 JICA 研修受け入れ

2/18-19 小原 奄美ガイドセミナー講師

2/20 松本 環境省モニタリング 1000 検討会

2/25 MTB ポタリング 安房コーススタート

3-9-12 奄美ガイド研修

4/1 消費税 8%に対応して料金を外税に改定

4/1 佐野、福留研修開始

4/5-14 「屋久島の食材を活かした料理」取材コーディネート。ディスカバリーチャンネルで今秋放映予定。

4/14 YNAC カフェオープン

4/22 池田君♡聖子さん、結婚入籍

6/8 松本 国際照葉樹林サミットエキスカーションガイド

Contents

巻頭言 地域の民俗文化の再興とエコツーリズム 小原比呂志 1

座談会 私の好きな木 YNACスタッフ 2

YNACこれからの10年 松本 毅 6

実はうどんもカフェも・・・やっています 松本 淳子 7

復活！チューブラフティング 渡部 幸 8

研修生自己紹介 佐野良一・福留千穂 9

蟲部 池田裕二 10

プアマンズ・ストロボ 樫村精一 12

蛾に名前をつけちゃいました！ 市川 聡 14

6/12-15 渡部・福留 佐渡実習

6/16 小原 佐渡エコツアーガイド養成講座

6/23-25 渡部・佐野・福留 国内旅程管理添乗実務研修

執筆・取材記事

・**日本初記録のアカネシロユミクチバ(新称)を屋久島で確認** (市川ら、2014) 月刊むし No.520 6 月号 ＝ 本文 14 ページ参照

・**北上する南の魚-知床半島、回復力を保持する島-屋久島**(Science Window 夏号 2014 7-9)特集「1℃の気づき」ということで地球温暖化をテーマに世界遺産知床と屋久島で何が起きているかという取材記事。市川が屋久島部分のインタビューを受けました。松本のサンゴの白化とその後の回復写真も掲載。

・**コケに誘われコケ入門**(小原)文一総合出版
屋久島の名所でよく見られる代表的なコケを紹介しています。

・**屋久島ブック2014** (小原) 別冊山と渓谷社
清流にザブン！沢登り

・BE-PAL 7 月号 No.408(小原)小学館
サラリーマン転覆隊 in 屋久島 絶叫キャニオニング

編集後記

☆ユネスコ無形文化財に指定された「和食」。最近「出汁」の奥深さに気づかされました。(た)☆YNAC うどんをはじめとして粉末だしも全国発送いたします。(じ)☆新居2年目の木造はとても涼しく、史上最高に過ごしやすい梅雨でした。(か)☆屋久島の一番の危険生物は酔っ払いです。(ゆ)☆当初は 20 ページもあった座談会。語り始めると止まりません。スタッフの自然度の高さを実感した夜でした。(わ)☆ボルダリング始めました。沢登りの登攀技術向上のためだけでなく、野外運動でつかう筋肉の構造やケアの仕方を同時に学んでます。来年はパワーアップしてることでしょ～(り)☆これから，お気に入りの木，花，虫をたくさん見つけていきたいです！(ち)☆ワールドカップも悲喜交々。気分を変えて、屋久島へ行こう！(さ)

YNAC 通信(ワイナックつうしん) NO.31

発行日:2014 年7月 10 日

発行:㈲屋久島野外活動総合センター

住所:〒891-4205 鹿児島県熊毛郡屋久島町宮之浦 368-21

TEL 0997-42-0944 FAX 0997-42-1850

E-mail:forest@ynac.com URL:http://www.ynac.com/

Facebook http://www.facebook.com/Ynacyakushima